





理事長 近影

# 拙堂と芭蕉

〃旅人とわが名呼ばれん初時雨〃

俳聖松尾芭蕉の句である、芭蕉は拙堂より、およそ二百年も昔の人であり、俳諧師と云う庶民文学者であったので、儒学者拙堂とはジャンルの異なる世界の人であった。しかし、共通する点がある。それは共に伊勢人という事ではない。芭蕉は若い頃、京の都で儒学を学び、中国文学を修めていたのである。その事が三十歳で江戸に出て俳諧師として大成した原点であった。即ち芭蕉の文学の根底には漢詩の世界があり、

漢詩人拙堂と相通じていたことが分かる。芭蕉五十年の人生の中で五度の「旅」を行い、各々「旅日記」を留め、多くの名句を吟じ、李白や杜甫に心を寄せた「旅人芭蕉」を、拙堂は一つの目標としていたのではなかったか。

今年(明治維新より百五十年の年に当たる。その八年前(1860年)三月三日、幕府を揺るがす大事件が江戸の町に起こった。世に云う桜田門外の変である。伊井大老が暗殺され、幕府の求心力は失われていった。その事を知る由もない拙堂は翌四日の朝、門人達を伴って紀伊半島一周の旅に出た。拙堂六十三歳の春のことであった。高年齢の拙堂をこの旅に駆り立てたのは何であったのか。紀州の文人小浦青涯(紀州藩士・松阪代官役人)や菊池溪琴等との再会は言うに及ばず、まだ見ぬ風光明媚な絶景の地への憧れであり、万葉歌枕の地への愛おしさゆえの思いであり、何より「旅人」としての情熱ではなかったか。松阪から高見峠を越え、

大宇陀に入り、昔常磐御前が幼き三児を抱き雪の中、竜門の地に逃れたと言われるこの里を訪れ、次の詩を留めた。

## 龍門の里を過ぐ 齋藤拙堂

満天の飛雪 荒村暗し  
懐裡の孤雛 凍に泣いて喧たり  
他日 斬然 頭角を見わし  
始めて知る 此地 是れ龍門

満天の飛雪くと詠い、空いっぱい雪の舞う中、常磐の懐に抱かれた赤子は寒さに泣きつづけた。その見こそ、後日平氏を滅ぼした源義経であり、この地が出世の地龍門の里であると、歴史の名場面が見事に詠われている。

〃旅人拙堂に乾杯〃

齋藤拙堂顕彰会理事長 加藤龍宗

## 俳句・短歌応募作品

## 選考結果

「第二回齋藤拙堂顕彰俳句短歌の募集」は、俳句百句、(応募者数三十名)短歌五十五首(応募者数二十九名)の作品が寄せられ、俳句は山崎満世先生、短歌は中川左和子先生の選により津市長賞はじめ、以下の作品が受賞されました。これらの作品は三月二十五日開催の第二回齋藤拙堂顕彰吟道大会で表彰式が行われ吟詠されました。また、選者の方から佳作をお選びいただきましたので本紙に掲載いたします。

## 俳句の部

## 津市長賞

騎馬像や冬松籟しゅうらいの手綱ひく

津市 北 貞子

吟詠 児玉 龍笙

選評 凜とした騎馬像が今の世もなお勇ましく手綱をひいている。冬松籟の手綱と省略したところが力強い。

## 津市議会議長賞

佳き事のシヨールを肩に城址過ぐ

津市 西沢 博子

吟詠 児玉 龍笙

選評 何か喜ばしい日にシヨールを肩にいそいそと城を通り過ぎる作者。佳き事のシヨールという表現が見事。

## 津市教育長賞

爽やかに交友広し拙堂士

津市 生川 泰子

吟詠 木崎 真陽

選評 拙堂は儒学者のみに留まらなかった。あらゆる分野でその才能を発揮した人。爽やかにの季語がいい。

## 齋藤拙堂顕彰会会長賞

凧こがらしに拙堂大人うしの聲を聴く

津市 内田 壽子

吟詠 木崎 真陽

選評 凧が鳴る。この音は拙堂大人の厳しい声かも知れぬと思わず背筋を正す作者。拙堂の人と形を彷彿とさせる。

## 佳作

梵鐘の時の移ろひなる秋思

津市 種田 啓子

冬日和濠ごうに影寄かげよす羽音はねおとかな

津市 福島 鎮子

鳩寄り来城址の片方紅葉濃し

津市 成田 真喜子

冬夕やけしむる白壁角櫓

津市 宮下 満寿美

墓並ぶ師弟の絆菊薫る

名古屋市 浅若 佳子

短歌の部

津市長賞

拙堂が眺めし伊勢の海の色

今尚碧く空に溶け合う

松阪市 森永 昌雄

吟詠 奥田 南山

選評 この雄大な海そして青く広がる

空を、きつと拙堂も眺めたであろうと

思いを馳せて詠んだ。優しい思いと包

容力のある作品。

津市議会議長賞

拙堂の教えを凛と宿したる

四天王寺の墓に星降る

津市 柴田 明美

吟詠 武村 観扇

選評 四天王寺に眠る拙堂とその墓を

詠む。まず結句が最高。拙堂の夜の墓

の様子を抒情的にまた詩的に読んでい

るところが素晴らしい。

津市教育長賞

遺されし拙堂が書の筆の跡

太きにありて力あふれむ

津市 種田 啓子

吟詠 畦地 司岳

選評 拙堂の筆跡は確かに太く強さが

みなぎっている。(展覧会で選者も拝見)

そういう拙堂の書に思いをこめて詠ま

れた作者の思いが伝わってくる。

齋藤拙堂顕彰会会長賞

専修寺の池の面おほふ大賀蓮

葉群に映えて立ち開きたり

伊勢市 浜千代 悦子

吟詠 久松 敬翠

選評 昨年、国法に指定となった専修

寺の大賀蓮を詠む。専修寺のあの池一

面に咲き誇る蓮の美しさが適確に詠ま

れている。

佳作

窓外の雪音激し五更時に

山陽は読む拙堂の文

伊賀市 世古 浩

秀でたる津藩の学者の坐すのを

きくことなしに老いたるを悔ゆ

津市 橋爪 教子

城跡の緑の陰さす角櫓

兄関はりし若き日思う

津市 山下 幸子

苔むせし拙堂の碑に降り注ぐ

冬の陽ざしよ小鳥の声よ

津市 樋田 由美

道際の藩校跡の図面にて

入徳門の在り所たしかむ

松阪市 村松 とし子



高虎像



入徳門



書道展入口

### 齋藤拙堂顕彰

## 小中学生書道展

### 応募作品選考結果

平成三十年三月九日(金)から十一日(日)まで、津市リージョンセンター(展示室)で齋藤拙堂先生を顕彰する県下の小中学生書道展を開催、応募作品四百五十点を展示、五百五十余名の方にご鑑賞を戴き盛況の裡に終了しました。

また、最終日に津市長・市議会議長・教育長のご臨席を得て優秀作品の表彰式が行われました。

各賞の作品は本紙掲載の通りです。

また、齋藤拙堂顕彰会会長賞は五十点に及ぶため、学校名と氏名のみを発表します。

なお、作品の選考は当会の理事で書家の稲垣武嗣先生によります。

### 小学生の部

#### 津市長賞

津市立立成小学校 五年 宮崎 花望



#### 津市議会議長賞

津市立育成小学校 三年 山中 莉子



#### 津市教育長賞

松阪市立天白小学校六年 伊藤 真央



#### 齋藤拙堂顕彰会会長賞

津市立豊が丘小学校一年 駒田 來星

津市立藤水小学校一年 坂井 心美

玉城町立有田小学校一年 上村 莉椰

玉城町立有田小学校一年 谷口 明璃

津市立立成小学校二年 小倉 月愛

津市立立成小学校二年 小野 裕佳

津市立豊津小学校二年 中川 幹也

津市立豊津小学校二年 中川 芽以

津市立豊が丘小学校二年 前川 愛結

津市立西が丘小学校二年 宮武 ももか

津市立高茶屋小学校二年 柳澤 夏妃

津市立南立誠小学校五年	津市立南立誠小学校五年	津市立西が丘小学校五年	鈴鹿市立明生小学校四年	松阪市立掃水小学校四年	津市立南立誠小学校四年	津市立南が丘小学校四年	津市立豊が丘小学校四年	松阪市立掃水小学校三年	松阪市立徳和小学校三年	玉城町立有田小学校三年	津市立立成小学校 三年	津市立立成小学校 三年	津市立豊が丘小学校三年	玉城町立下外城田小学校二年	
三井	橋本	倉島	安村	小倉	山本	羽田	坪井	水野	飛騨	梶間	上村	出口	紀平	伊藤	取嶋
愛弓	紬	沙空	美咲	夢香	明祐美	琉華	麗美伽	絢菜	こころ	優花	寧音	ゆい	晴大	さくら	竜雅



会場風景

松阪市立漕代小学校六年	玉城町立有田小学校六年	玉城町立有田小学校六年	明和町立修正小学校六年	津市立豊津小学校 六年	松阪市立天白小学校五年	玉城町立有田小学校五年	玉城町立下外城田小学校五年	津市立西が丘小学校五年
岡本	中西	西堀	小寺	野島	加藤	永田	尾崎	宮武
愛菜	茉莉	修斗	冬馬	百々花	優芽	莉子	桜暉	春花

### 中学生の部

#### 津市長賞

私立三重中学校 二年 地主 侑真



#### 津市議会議長賞

松阪市立三雲中学校三年 野田 実来



#### 津市教育長賞

セントヨゼフ女子学園中学校

二年 宮武 花音



齋藤拙堂顕彰会会長賞

津市立橋南中学校 一年	青木 玲花
津市立豊里中学校 一年	谷 あかり
セントヨゼフ女子学園中学校	長谷川まゆ
松阪市立三雲中学校一年	楠村まゆ佳
津市立西橋内中学校二年	大岡 史孝
松阪市立三雲中学校二年	河戸 里緒
松阪市立東部中学校二年	松崎 和歌
鈴鹿市立天栄中学校二年	山口 華央
松阪市立久保中学校二年	脇 菜月
津市立豊里中学校 三年	森川 月花
松阪市立三雲中学校三年	泉 祐希
玉城町立玉城中学校三年	高木 桃奈
津市立久居東中学校三年	平手 愛理

松阪市立東部中学校三年 森 琴音

追記

今回の課題は次の通りでした。

小学校一年〓つくし 二年〓みどり

三年〓せつどう 四年〓入徳門

五年〓有造館 六年〓自然の美

中学生〓津城懐古



市長表彰

二十九年下期の拙堂会関係事業

拙堂会関係事業

石水博物館主催・当会協賛

生誕二百二十年記念齋藤拙堂展

平成二十九年十二月一日から三十年

二月四日まで、津市垂水の石水博物館

で生誕二百二十年を記念して『齋藤拙

堂展』が開催されました。

玄孫の齋藤正和当会会長ご所蔵の遺

墨・著書などを主体とする展示で、拙

堂の幅広い活動が紹介され、特に十二

月十日・一月十九日の、当会の齋藤会

長によるギャラリートークには多数の

来観者があり、また期間中の来館者は

約七百人に上りました。

理・為政者の在り方が語られました。  
 催され、場内満員の聴衆のもとに、拙堂の漢詩文を通じてみる国家の危機管理・為政者の在り方が語られました。

石水博物館主催

齋藤拙堂展記念講演会

講師 齋藤正和(当会会長)

演題 「齋藤拙堂の今日的意義」

平成二十九年十二月十六日、津商工会議所ホールにおいて記念講演会が開



『拙堂齋藤先生碑』

説明板の設置

平成三十年二月二十六日(月)津偕楽公園内にある拙堂齋藤先生碑「説明板」の竣工披露がありました。

当日は当会会長・理事長・事務局長・理事・監事の方々のほか、説明板の設置に係わって頂いた津市生涯学修課・中村光司主幹にご出席頂き、晴天の中、和やかに披露が行われました。

説明板の設置は、当会発足以来の大きな懸案事項であり、津市、東海財務局等の関係方面に対する、理事長をはじめとする会長・事務局長の特段のご努力の結果実現を見たものであります。また、前記竣工披露にご出席の津市・中村光司主幹のご指導があり、施行については(株)西出様からの格別のご支援を得たことを申し添えます。この説明板が、広く拙堂の認識と理解に役立つことを願う次第です。

なお、設置費用は本会理事・監事の拠出によります。(文責 塚澤正)

『拙堂齋藤先生碑』説明板

拙堂齋藤先生頌徳碑

この碑は、江戸後期の津藩が生んだ偉大な学者文人、齋藤拙堂の徳を称えるため、没後50年に当たる大正5年(1916)に、地元の有志(白石の裏側に刻名)によって建てられたもので、家額(題字)は伯爵藤堂高紹(藤堂宗家第13代)の揮毫、碑文は門人三島中洲(二松學舎大学の創設者)の撰によります。

齋藤拙堂は、寛政9年(1797)に江戸の津藩邸で生まれ、幕府の学問所(昌平黌)教授古賀精里について学び、文政3年(1820)、津藩校有造館の創設に伴い24歳のときに教官に採用され津に移りました。26歳の時には早くも講官(教授)に昇進し、29歳の時は幼い第11代藩主藤堂高猷の侍読(教育主任)を兼務します。その後は、生涯にわたり藩校教育及び藩主の学問指導と政治顧問の仕事に献身し、特に藩校督学(学長)として、津藩の文教を「天下の文藩」といわれるまでに向上させた功績は大きいものがあります。

拙堂は、「拙堂文話」や紀行文「月瀬記勝」などの著作によって全国に文名が高く、また経世の志に篤く、天保大飢饉や外国船が日本近海に出没する事態に遭遇して、内外情勢の研究を進め、有効な政策提言や有益な啓蒙活動を行いました。59歳の時、幕府は拙堂の高い学識を評価し、儒官(昌平黌教授)に抜擢しようとして第13代將軍家定に謁見させましたが、津藩への恩義から拙堂は就任を辞退しました。63歳で藩校督学を退任し、以後は津城北郊の茶磨山荘で自適の生活を送り、慶応元年(1865)に69歳で没し、四天王寺に葬られました。

こゝ津偕楽公園は、江戸時代後期に開かれた藩主の別荘跡です。この頌徳碑が津藩ゆかりの津偕楽公園に建てられたのも、拙堂の藩での功績を、またそれが郷土津市の誇りであることを示すものと言えるでしょう。

齋藤拙堂顕彰会



齋藤拙堂像(齋藤正和氏所蔵)



第二回 齋藤拙堂顕彰

吟道大会

平成三十年三月二十五日(日)津セ  
ンターパレス二階の中央公民館におい  
て、第二回齋藤拙堂顕彰吟道大会が、  
主催津市吟剣詩舞道連盟、共催津市、  
後援齋藤拙堂顕彰会によって開催され、  
前葉津市長のご挨拶の後、加藤理事  
長・齋藤会長のご挨拶に続き、俳句・  
短歌入選者の表彰が行われ、津市長代  
理および津市議会議長代理・教育長・  
加藤理事長・齋藤会長から各賞の賞状  
が贈られ、受賞作の四句四首が吟じら  
れました。吟道大会では独吟六十四、  
合吟七、詩舞七が演じられ、構成吟「齋  
藤拙堂の心を詠う」九詩一舞が、会  
の掉尾を飾りました。



表彰風景

平成三十年度

拙堂会総会報告

平成三十年五月七日(月)アスト津・  
橋北公民館会議室において第二回総会  
が開催され、各議題が満場一致で可決  
されました。以下に平成三十年度事業  
計画等を要約して報告します。

一、平成三十年度事業計画

① 津公園内『拙堂齋藤先生碑』の洗  
濯(碑の苔の剥離と洗浄)

平成三十年六月初旬の予定

② 第三回俳句・短歌の募集

募集期間 平成三十年十月一日

(月)～同年十二月二十日(木)

表彰式 平成三十一年三月二十

四日(日)(吟道大会会場)

③ 第二回小中学生書道展

募集期間 平成三十年十二月十

日(月)～翌年一月十二日(土)

書道展 平成三十一年二月九日

(土)～同年二月十一日(月)

場所 津市リージョンプラザ三階  
表彰式は最終日の十四時三十分

④ 第三回拙堂顕彰吟道大会(後援)

日時 平成三十一年三月二十四

日(日) 十二時～十六時

場所 センターパレス二階

⑤ 月ヶ瀬観梅のバス旅行

日時 平成三十一年三月十日(日)

の予定(詳細は後報)

四、新年度財政の規模 五二万四千元

五、会則の改定

総会について、会則十三条で四月に  
開くことになっていましたが、決算の  
関係で事業年度終了後二ヵ月以内に開  
くこととしました。新会則は本号に折  
込みました。

六、新理事の選任

山崎 満世 『津市民文化』俳句選者

中川 左和子 『津市民文化』短歌選者

小川 直紀 津市市展審査委員

林 朝子 三重大学 准教授

安村 久二男 元百五銀行 支店長

(敬称略)

## 拙堂今昔

### (拙堂齋藤先生碑)

本年二月二十六日、津公園内の「拙堂齋藤先生碑」に説明板が設置され披露が行われた。この実現を、本会入会の目的の一つとしていた私としては、尽力された方々のご努力に敬意を表しつつ、慶祝の意を共にしている。

当日の齋藤会長の説明によれば、頌徳碑の建立は大正五年(1916)で拙堂没後五十年に当たり、本年は没後百五十余年ということになる。そこで『今昔』という視点で、俗な話ではあるが、頌徳碑の建設費用が如何ほどのものであったかを推定してみた。

戦前の拙堂会報の『拙堂先生建碑顛末概要』に、大正五年十月十五日付伊勢新聞記事の抜粋が掲載されていて、序文の次に田中治郎左衛門による事業

報告がある。これによると三島中州による撰文の脱稿が大正三年二月、同年十二月に有志が頌徳碑の建立を相談、翌四年九月津市で發起人会が開催され、翌五年六月に津市長に稟請して津偕楽公園内に設置する允許を得、同月二十



頌徳碑と説明板

三日地鎮祭を行い、十月十四日序幕式が挙行されている。なお石碑は東京で刻まれ、『汽車に搭じて之を津へ輸致』している。また、碑の篆額(碑の上部の篆書で書かれた文字)と金幣(貨幣)を旧藩主・伯爵藤堂高紹(たかつぐ)公から

いただいたほか『廣く資金の勸募をなさざりしも、幸いに門人故旧有志諸君の自ら進んで許多(多数)の資材を得て』千四百四十七円の寄付金が集まり、経費総支出額は九百四十一円十銭、残額五百五円九十銭を遺跡保存会に繰り入れたと報告されている。この金額は現在の価格で如何ほどになるうか。

「江戸の家計簿」(磯田道史著・2017年1月刊・宝島社新書)の現代感覚という換算方式は、現在の大工見習の日当を基準に価格の推定をしている。これに倣って同書の日当一万五千円を大正四年の大手の間賃一円十銭(値段の風俗史・週間朝日・昭和56年刊)で除すると13,636倍。これを千四百四十七円に乗ざると19,731千円で、期せずして約二千万円の資金が集り、建設費に千三百万円、差し引き七百万円ほどが残ったことになる。拙堂先生の遺徳、洵に美事と云うのほかはない。因みに今回の説明板の設置費はおよそ二十万円である。(文責 塚澤 正)